

四つの資本主義⑩

法政大学 経済学部教授（客員） 渡部 亮

Terence Kaeley 著『Sex, Science & Profits』によれば、国際会議では、公式日程上のスピーチやプレゼンテーションではなく、懇親会や休憩時間での非公式な情報交換が重要であり、そうした情報交換の場がクラスターの役割を担う。元来人間はおしゃべりが好きであり、情報交換に無上の喜びを感じる。これは、人間の遺伝子に先人や他人の行為を真似する信号が含まれているためであろう。オールスターゲームのダッグアウトで一流選手同士が情報交換するが、これも一種のクラスターである。

クラスター形成がなぜ必要かという点、現代のイノベーションは、複数の技術や人材の融合によって生まれるケースが多いためである。前回述べたヒップホップは、アート、ファッション、音楽、テクノロジーなどの融合である。そのほか放送と通信、携帯電話とインターネット（スマホ）、インターネットと小売りと宅配（ネット通販）なども融合の例である。これは現代にかぎられた現象ではなく、古くは蒸気機関車と鉄の線路、活版印刷など多種技術融合の例は枚挙に暇がない。

シリコンバレーは、現代のクラスターの典型例だが、そこにはハイテク分野の競争相手が多数集り、お互いに情報交換することによって知のクラスターが形成され、好影響（外部経済効果）が働く。技術者や起業家がシリコンバレーのようなクラスターに集まる目的は、情報や暗黙知を競争相手と共有することであり、競争と協調の相乗効果から新製品が生まれる。そのためには基礎的な研究基盤と開放的な社会システムの双方が不可欠である。またロンドンのシティは国際金融のクラスターだが、そこには①内外の情報が自由に交換される開放的な情報社会、②バンカー（金融業者）の居住に適した魅力的な文化価値（コンサート、演劇、美術館）、③バンカーだけでなく会計士や法律家を始めとする多様で多彩な人材の外交的手腕と人的ネットワーク、④子弟教育を受け持つパブリックスクール（私立の有名校）などが存在し、金融業の社

会インフラとなっている。

オックスブリッジのカレッジ

英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学（オックスブリッジ）も「知のクラスター」を形成している。DNAの二重らせん構造の解説者たちが、ケンブリッジ大学のカヴェンディッシュ研究所を共同研究の舞台としたことはよく知られている。両大学はそれぞれ30以上のカレッジ（学寮）によって構成される。カレッジは教職員と学生の共同生活の場であり、教員の研究室、学生寮、事務課、図書館、礼拝堂、談話室、パブ、外部研究者の宿泊施設などが併設される。学生は学期中、カレッジの寮に寄宿しなければならない。教職員はカレッジ内に住む必要はないが、カレッジから一定距離内に居住することを求められる。狭い範囲内に活動や居住の場が限定された、中世の村落や修道院の趣がある。自給自足とは言わないまでも、学期中はカレッジ内で日常生活が完結する。

カレッジの伝統は、英国における学問研究の歴史とも関係ある。もともと自然科学や医学は、実験など帰納的方法論をとった。法学の分野でも、大陸法が演繹的なのに対して、英国法（コモンロー）は帰納的である。科学の場合であれば、研究者はお互いに実験結果を持ち寄って検証する。それによってはじめて理論的進歩が生まれる。その過程で、グループ内の誰かひとりが成果を一人占めにしては困るから、お互いに信頼できる仲間が集まって共同研究する。つまり昔の商人ギルドのように、学問研究の場合にも、相互信頼が不可欠である。信頼感を醸成するには、共同生活が一番だから、寝食を共にするようになったのであろう。

食事を共にするという伝統は、少人数教育と並ぶカレッジ生活の特色である。毎日の昼食も、カレッジに所属するフェロー（教員、研究員、上級管理者）どうしが肩を寄せ合って食べる。席順は決まっておらず、来た順に詰めて着席しなければならない。そのため面前と左右に座つ

た人とは、厭でも話をせざるを得ない。昼食のほかにも、教員と学生が集う公式ディナー（フェローが一段高いテーブルに付くのでハイテーブルと呼ばれ、全員が黒のガウンを着用する）、フェローだけが集まる夕食会など、始終食事がある。なるべく多くの教員や研究者が食事に集まることによって、フェロー同士の交流を促進している。各カレッジは地代収入などを蓄積した基本財産（endowment）を持ち、そこからの投資収益や観光収入が財政的に活かされている。

ちなみにカレッジ（college）の語源は「仲間（col）が集まる（legere）」といった意味であり、同僚（colleague）と共通語源である。ラテン語はひとつの単語が複数の意味を持つといった特色があり、legereにも「集まる」という意味と「選ぶ」という意味がある。単に集まるだけではなく、信頼できる研究者を選抜する。研究者仲間で論文の査読を行って成果を共有するとともに、すぐれた研究者の地位を仲間内で認定する。近年、同一分野のノーベル賞を数人の研究者が同時に受賞するのも、研究の場が知のクラスターだからであろう。

現代では、カレッジが主として教育の場となり、各専門分野の研究は学部や研究所が中心になっているが、カレッジが私的交流の場であることには変わりない。昨今のように研究の学際性が高まると、身近に他分野の専門研究者が存在することのメリットは大きい。英国は個人主義のカルチャーが強い国だが、カレッジ内には共同体主義のカルチャーも存在する。終身的地位を確立した教授と若い研究者の関係は親方と徒弟の関係に似ており、位階制（ヒエラルキー）があるようだ。こうしたことが、世界的にみても有数の教育研究機関としての地位を保つ、原動力となっている。

ガラパゴス化現象

日本経済の再生にも、学習や模倣の場としてのクラスター形成が不可欠である。それは異業種の相互交流による融合と創造的模倣によって可能になる。しかし従来は、融合や模倣を妨げる閉鎖性や縦割りのシステムが存在した。日本の社会システムは、公共交通や電力事業の地区別細分化、年度と暦年や西暦と和暦の併用など、きわめて複雑である。また日本人の英語教育だけでなく、外国人が日本語を容易に学べるよう

に、日本語を簡素にする必要もあるが、実際には名字などで難解な漢字が使用される。英語の慣用句には It's Greek to me.（難解なギリシャ語みたいで私には意味不明）という表現があるが、そのうち外国人が It's Japanese to me. と言い出すかもしれない。

ギリシャは「四つの資本主義」の分類では、イタリアやアルゼンチンと並ぶ大衆迎合主義、縁故主義、部族主義の国である。これら諸国は、列強の植民地化を免れたこともあって、特殊な文化や言語を温存している。映画「日曜はダメよ」などに主演した往年の大女優で、ギリシャの文化大臣や欧州議会議員なども務めたナナ・ムスクーリは「文化はギリシャの重工業である」と述べた。このことが象徴するように、これら諸国は優れた文化を誇っているが、問題は、社会システムや制度慣行が個別に複雑で、外国人の理解を得にくいことである。国内市場への参入障壁も高いし、既得権も根深い。

一時期の日本で、電気機械製品などが「ガラパゴス化した」といわれたが、これも閉鎖性のあらわれであった。この言葉の意味は、製品自体は高級機能を有していたが、日本だけでしか使用されない独自の映像方式や通信プロトコルを使用し、世界標準から乖離してしまった状況を指した。しかしこれではまるですべての責任が電機メーカーの側にあったように聞こえるが、実態は少し違っていたのではないかと？

周知のように「ガラパゴス」は、南米のガラパゴス諸島を探索した英国の生物学者チャールズ・ダーウィン（ケンブリッジ大学出身）にちなむ言葉である。ダーウィンは、特殊な進化形態を遂げた生物を発見し『種の起源』を著したとされるが、彼の進化論は、生物が環境に適應する過程を論じたものであり、特殊な発展形態を遂げたのは、生物側の責任というよりも、特殊な環境のなせる業（わざ）であった。そのような観点からすれば、日本製品のガラパゴス化は、メーカーの責任というよりも、日本の事業環境や規制制度、社会システムの側に問題があったはずである。つまり開放的なクラスター形成を阻害されたことが、ガラパゴス化を助長したのではなかろうか。

（以下は次号に続く）

わたべ りょう（法政大学教授）